

# 『菩薩地』戒品所説の三聚淨戒の構造

齊 藤 舜 健

## 序章 問題の所在と方法論

菩薩が受持すべき三聚淨戒と受戒法、そしてその戒相としての四重四十三輕戒を説く『瑜伽師地論』『菩薩地』〈戒品〉（以下、戒品）は、十重禁戒などの梵網戒を説く『梵網經』と並んで古来、中国・日本において尊重されてきた。

従来、菩薩戒を研究する上で、それぞれの戒を受持する菩薩の機根、つまり階位を基盤として種々の菩薩の区別をして考察するという態度が無かったように筆者には思われる<sup>(1)</sup>。

そこで、この戒品所説の三聚淨戒を受持すべき人々は、入大地以前の菩薩である、という限定を加え論述してゆきたい。以下この限定、つまり命題の論証を試みたい。戒品所説の四十三輕戒の第一の輕戒では、あらゆる菩薩が一日一度は礼拝・供養すべき対象としての仏・法・僧の三宝を、如来の或は如来を示すチャイトヤ・法の或は法を示す書物のあるところ・菩薩の經藏・菩薩の經藏のマトリカー・十方の入大地の諸菩薩の僧伽とする。一般に菩薩が供養する対象としての僧宝は、〈如実修行の者〉であり、初地以上の菩薩を指す<sup>(2)</sup>。それ故「あらゆる菩薩」に対して初地以上の菩薩を僧宝として供養すべし、と規定していることになる。ところが、礼拝・供養しなくても無違犯であることが例外として次のように示される。つまり、「あらゆる菩薩」ということに入大地前後の区別を加える例外条項として、

すでに清淨樂地にはいった〔菩薩〕については無罪である。なぜなら、清淨

意樂の菩薩は、例えば證淨を得た比丘が常に法爾として大師に仕え、最高の供養をもって法と僧伽を供養するようなものである。

anāpattiḥ śuddhāśaya-bhūmi-praviṣṭasya. tathā hi śuddhāśayo bodhisattvaḥ tad-yathā avetya-prasāda-lābhi bhikṣur nitya-kālam eva dharmatayā śāstāraṃ paricarati paramayā ca pūjayā pūjayati dharmam saṃgham ca<sup>(3)</sup>.

とある。すでに清淨意樂地に入った者とは「菩薩地」〈住品〉に規定されるように、意樂が清淨になるのは極歡喜住以上であって、初地以上の菩薩のことである。即ち、仏・法・僧の三宝を供養するのは、入地以前の菩薩であり、入地以後の菩薩は所作そのものが三宝を供養、つまり莊嚴することになるのである。このように、戒品所説の三聚淨戒を受持する菩薩の特性を例外規定で性質を削除・限定し、明確にするのである。故に、戒品のこの第一の輕戒は初地に入る以前の菩薩を対象として定められた条項であると判明するのである。

また、律儀戒に住する入大地以前の菩薩が、遙かなたにある入大地の菩薩を目指して怠ることなく漸次に修習を完成すべきことを示すものとして、

彼〔の菩薩〕にはすでに大地に入った諸菩薩についての優れた、無量・不可思議な長時にわたる最も為し難い全ての菩薩の〔なすべき〕学処を聞いても〔彼の〕心には過度の恐れ、或は怯え、或は心の萎縮がないのだ、彼には次のような思いだけがある、「彼ら〔入大地の諸菩薩〕もまた人間であって、順次に菩薩の諸々の学に於て学びつつ、無量・不可思議なる身と語の律儀を身につけ完成したのである。〔入大地以前の〕我々もまた人間であって、順次に学びつつある〔我々〕は、確実にその身と語の律儀を完成することを得るであろう」と。

sarva-bodhisattva-śikṣā-padāni cāśya mahā-bhūmi-praviṣṭānām bodhisattvānām śrutvā udārāṇy aprameyāṇy acintyāni dīrgha-kālikāni paramaduṣkarāṇi na bhavati cetasā uttrāso vā layas saṃkoco vā nānyatrāśyaivam bhavati. te'pi manuṣya-bhūtaḥ krameṇa ca śikṣamāṇāḥ bodhisattva-śikṣāsv aprameyācintya-kāya-vāk-saṃvara-samanvāgatāḥ samvṛttāḥ. vāyam api manuṣya-bhūtaḥ krameṇa śikṣamāṇāḥ

asaṃśāyam anuprāpsyāmas tām kāya-vāk-saṃvara-saṃpattim iti<sup>(4)</sup>.

とある。三聚淨戒を授かる場合、律儀戒・摂善法戒・饒益有情戒の三種において修学することを誓って受戒するのであり<sup>(5)</sup>、三聚淨戒に住する菩薩とされるのは、入大地以前、即ち初地以前の菩薩からはじまることになる。

このように戒品の所説は一方で初地以前の菩薩を対象として述べられていながら一方では、「三聚淨戒に住する」という形で示されているものには『十地経』に説かれるような初地以上の菩薩のあり方とも対応するものがある。ここに、菩薩がそれぞれの階位でそれぞれに三聚淨戒を修習するという〈重層構造〉と呼べるものが、菩薩の修習の体系のなかにあることを示している<sup>(6)</sup>。この重層構造を意識しないかぎり、菩薩の修習としての三聚淨戒を示す、戒品の所説を正しく読み取ることはできない。

さきに述べた菩薩の階位に於ける重層構造に留意して、本稿では戒品所説の三聚淨戒の構造を明らかにしてゆきたい。

#### 〔問題の所在〕

従来の戒品に対する見解を、以下のように纏めることができる。戒品の記述は、論証なしの無秩序な戒の条項・無秩序な多方面にわたる戒の分類区別にすぎず、それら相互の関連を明らかにしていない、即ち、

- (1) 論証なしの無秩序な記述
- (2) 諸項目相互の関連を明らかにしない

というのがその中心的な内容である。その一例を挙げると、菩薩の律儀戒は七衆の別解脱律儀とされるが<sup>(7)</sup>、比丘戒の規定と戒品中の比丘戒と別立された事項である輕戒に規定されるいくつかの条項とが相対立することなどを根拠とする見解である<sup>(8)</sup>。

そこで本稿では戒品の記述を三聚淨戒の構造を明らかにし、〈一つの整合のとれた体系〉として、菩薩戒を捉える視点が存在することを主張する。その視点とは略説すれば、さきに述べた〈重層構造〉に留意しつつ、三聚淨戒を平面的ではなく、菩薩の諸階位の修習に於ける相互包含関係として、立体的に捉えるものである。

その視点に従って戒品の三聚淨戒の構造を明らかにする手順を以下に示す。

### 〔方法論〕

本稿においては次に示す資料を直接の検討対象とする。

1) 「菩薩地」全体の中で戒品を捉える。当然のことではあるが、〈重層構造〉は戒品の所説を「菩薩地」全体の中に位置づけることによってはじめて明確になるものである。

2) 「菩薩地」が所依とする經典の一つである『十地經』の所説と対応させる。『十地經』が示すそれぞれの地での菩薩のあり方と戒品に示される入大地以前の菩薩の指標としてのあり方が対応する。しかのみならず、「十地に於ける菩薩のあり方については『十地經』に従って理解すべきである」<sup>(9)</sup>、と「菩薩地」〈住品〉に示されている。よって『十地經』に示される菩薩のあり方は戒品を読む場合、常に対応させられねばならぬ。

3) 「菩薩地」を前提としている諸論書のうち、『大乘莊嚴經論』<sup>(10)</sup>・『摂大乗論』<sup>(11)</sup>の記事と対照比較する。それぞれ、「菩薩地」と深い関係にあり<sup>(12)</sup>、戒品の所説との比較がなされる必要がある。

さらに、これらの資料を次のような対応関係に基づき検討する。

1) 菩薩の階位と三聚淨戒との関係を明らかにする。

冒頭に述べたように、戒品所説の三聚淨戒は入大地以前の菩薩を対象としながらも、その内容は初地以上の菩薩のあり方をも示すものである。故に菩薩の諸階位における三聚淨戒の位置づけ方を明らかにしなければならない。ここでは主として「菩薩地」の所説に基づいて菩薩の修習の深まりを三つに分け、その三つの観点から検討する。(1)十三住でいう初発心以前・最初の階位である種姓住の菩薩の諸特質と三聚淨戒に示される学習事項との関連を明確にする。(2)初発心を条件とし、最初に三聚淨戒を受持する階位が勝解行住とよばれる。その勝解行住における学習事項と三聚淨戒との関連を明確にする。(3)三聚淨戒の〈重層構造〉を最も端的に示す階位である初地から第十地（「菩薩地」に示す階位である十三住に従えば、極歡喜住から最上成滿菩薩住）における学習事項と三聚淨戒の関係を示す。ここでは『十地經』の所説をも対応させる。

2) 菩薩の修習すべき事項のなかで三聚淨戒を位置づける。

戒品は「菩薩地」のなかでは戒波羅蜜を明かす章であるとされる<sup>(13)</sup>。しかしながら、他の五つの波羅蜜の章の記述と戒品での三聚淨戒の記述とは重複するものが非常に多い。そこで、六波羅蜜と三聚淨戒として示される修習すべき事項の対応関係を検討する。その場合「菩薩地」を中心としながらも、『大乘莊嚴經論』・『摂大乘論』の記述との対比を行い、三聚淨戒のもつ意味を明確にする一助としたい。また、『摂大乘論』においては、増上三学の内、増上戒学が三聚淨戒とされるので<sup>(14)</sup>、増上三学の中での位置づけとして、『摂大乘論』に関しては検討する。

## 第一章 菩薩の階位における三聚淨戒の位置づけ

「菩薩地」〈住品〉には菩薩の階位としての十三住が説かれる。順次に示すと、種姓住、勝解行住、極歡喜住、増上戒住、増上心住、覺分相應増上慧住、諸諦相應増上慧住、縁起相應増上慧住、有加行有功用無相住、無加行無功用無相住、無礙解住、最上成滿菩薩住、如来住である。概観すれば、種姓住とは菩薩種姓を具足した状態、勝解行住は初発心するが未だ清淨意樂、つまりまだ見道に入っていないすべての菩薩の状態をいう。それ以降の極歡喜住から最上成滿菩薩住は『十地經』の歡喜地から法雲地に相当する。これら十二種が諸菩薩の菩薩住である。最後の如来住とは一切の菩薩の住を越えて現等覺されたものをいう。

この十三住の内、如来について語られる如来住を除いた十二住は、(1)志向性として菩薩であることを前提とする種姓住、(2)初めて菩提心を発すことで成立する勝解行住、(3)菩薩行を円満にすることを目指す極歡喜住以降の三つに大別される。以下にこの三つについて三聚淨戒との関係を検討してみたい。

### 第一節 種 姓 住

菩提心を発していることが三聚淨戒を受持する条件であるが<sup>(15)</sup>、種姓住の菩薩は三聚淨戒を受持しているわけではない。しかしながら、三聚淨戒に示さ

れている内容を本性として備えているわけである。ここでは三聚淨戒を受持していない菩薩の本性の部分と三聚淨戒の示す内容との対応関係を考察の基盤とし、持戒とはいわゆる戒体として他から具足されるのではなく<sup>(16)</sup>、種姓住の菩薩にはすでに因として具足されており、修習の深まりにおいて、煩惱のおおより発現してゆく性質のものであること<sup>(17)</sup>を示す一つの視点としたい。

「菩薩地」〈住品〉にはそのような種姓住の菩薩のあり方が次のように述べられている。

そのうち種姓住の菩薩は、そ〔の種姓住〕とは別のあらゆる十一の菩薩の住と如来住の因にのみ於て (hetu-mātre), 因の摂受として活動する。しかし彼によってそ〔の種姓住〕とは別のどれかの住が発趣されてもいないし、獲得されてもいないし、清浄にされてもいない。如来住が〔発趣・獲得・清浄にされていないのは〕いうまでもない<sup>(18)</sup>。

種姓住の菩薩は如来住に至るまでのあらゆる菩薩の特性を因として備えているのだから戒品で規定される菩薩のあるべき姿が種姓住の菩薩に〈本性として〉備わっていることになる<sup>(19)</sup>。菩薩のあるべき姿とは、後に述べることになるが三聚淨戒に示されるものである。つまり種姓住において、その後の諸階位にそれぞれに三聚淨戒を修習するという重層構造の初まりがみいだされるのではないのか。

「菩薩地」〈住品〉に、

種姓住の者のあり方は〈種姓品〉に示したが、種姓住の菩薩についてそれを（種姓品の箇所）詳しく〔読んで〕理解されるべきものである<sup>(20)</sup>。

と示される。ここで「菩薩地」〈種姓品〉に示される種姓住の菩薩のあり方を概観してみなければならない。「菩薩地」〈種姓品〉には、

菩薩には諸波羅蜜の種姓のしるしとしてこれら六〔の波羅蜜〕が備わる。それら〔のしるし〕によって他の人々は、「このものは菩薩である」と知る。布施波羅蜜の種姓のしるしであり、戒・忍辱・精進・静慮・智慧波羅蜜の種姓のしるしである<sup>(21)</sup>。

と説かれ、そこには、ある人が菩薩であるかどうか知るための六波羅蜜菩薩種姓のしるしが示される。

六波羅蜜のしるしが備わることで第三者に、ある任意の人が菩薩であるのかどうか確認できる。菩薩種姓の者のあり方がそのまま示されていると云ってよい。

それでは、その六波羅蜜の種姓のしるしとはどのようなものか見てみよう。布施波羅蜜と戒波羅蜜それぞれの第一番目の規定を示すことになるが、それらにはすべて、菩薩が、〈本性として (prakṛtyā)〉これこれというものである、と記されていることに注目したい。

布施波羅蜜：その〔六波羅蜜の〕内、以下のことが菩薩の布施波羅蜜の種姓のしるしである。即ち、菩薩は、まさに本性として布施を好むものである<sup>(22)</sup>。

戒波羅蜜：その〔六波羅蜜の〕内、以下のことが菩薩の戒波羅蜜の種姓の印である。即ち、菩薩は本性として軟品の不善なる身語意業を備え、過度に凶暴でなく、過度に有情を傷つけるものでない<sup>(23)</sup>。

このように、菩薩種姓のしるしを菩薩が本性として備えているものとして示す。

ところで、第二章で述べることになるが、これら六波羅蜜の種姓のしるしは、戒品の三聚淨戒のあり方が規定されるなかで示される菩薩のあり方と内容上、対応関係が見られる<sup>(24)</sup>。

しかし、種姓住の菩薩は、菩薩のあるべき姿を随煩惱に随染されることで露にしていない<sup>(25)</sup>。また、発趣されていないのだから自覚的に菩薩のあるべき姿を実現しようとするわけでもないのである。序章で述べたように戒品所説の三聚淨戒を受持するのは勝解行住の菩薩である。自らのあるべき姿を自覚的に実現しようとする菩薩は、初発心によって成立する勝解行住にあって初めて見いだされる。それでは、次節で勝解行住と三聚淨戒の関係を検討してみよう。

## 第二節 勝 解 行 住

勝解行住はすでに述べたように菩薩の初発心を契機として成立する。この住は戒品所説の三聚淨戒を受持する菩薩の階位である。そこで本節では勝解行住の菩薩が三聚淨戒を受持し修習する有様を示したい。

菩薩の諸階位における勝解行住の位置は「菩薩地」〈住品〉に、  
そ[れらの諸階位]の内、いずれが菩薩の勝解行住か。即ち、菩薩の初発心  
してから未清浄な勝意樂の菩薩行なるもの、それが彼[の菩薩]の勝解行住  
である、と云われる。

tatra katamo bodhisattvasyādhimukti-caryā-vihāraḥ. iha bodhisattvasya  
prathamam cittotpādam upādāyāśuddhādhyaśayasya yā kācit bodhi-  
sattva-caryā, ayam asyādhimukticaryā-vihāra ity ucyate<sup>(26)</sup>.

また、勝解行住の菩薩によってあらゆる菩薩の住と如来住が発趣されている。  
しかし決して獲得されていないし清浄にされていない。ただその勝解行住の  
みが獲得されたのである。そして勝解行住を清浄にすることに彼[の菩薩]  
は取り掛かったのである。

adhimukti-caryā-vihāriṇā punar bodhisattvena sarve bodhisattva-  
vihārās tathāgataś ca vihāraḥ ārabdhā bhavaṃti. no tu pratilabdā na  
viśodhitāḥ. sa eva tu adhimukti-caryā-vihāraḥ pratilabdho bhavati.  
tasyaiva cāyam viśuddhaye pratipannaḥ<sup>(27)</sup>.

と規定される。種姓住の菩薩は三聚浄戒に示される内容など菩薩の性質を因と  
いう消極的なあり方で具しているのに対し、勝解行住の菩薩はそれを円満たら  
しめんとする勝意樂が未浄なものであるとしても積極的に行じてゆこうとする  
のである。それ故、勝解行住の菩薩の修習と三聚浄戒の関連を考察するにあたり  
初発心、つまり勝解行住へ悟入する菩薩のあり方（以下、初発心）をまず明  
きらかにし勝解行住に住すべき前提を三聚浄戒との関係で示さなければなら  
ない。そしてその性格を踏まえた上で、勝解行住にある菩薩のあり方を検討する。

「菩薩地」〈発心品〉に、初発心の五種類の相を挙げるなかで<sup>(28)</sup>、自性を  
「あらゆる菩薩の正誓願の最初でありそれ以外の正誓願を包摂するものである。  
それ故その初発心は最初の正誓願を自性とする<sup>(29)</sup>」とする。その正誓願は、  
ねがわくば、私は無上正等覺を現等覺したい、そしてあらゆる有情の義利を  
為すものでありたい、一向に決定した涅槃と如来の智に安立せられたい。  
aho batāham anuttarāṃ samyak-saṃbodhim abhisambudhyeyam sarva-  
sattvānāṃ cārtha-karaḥ syām atyanta-niṣṭhe nirvāṇe pratiṣṭhāpayeyam



tathāgata-jñāne ca<sup>(30)</sup>.

と言表する。これらを初発心の行相とするのであるが、初発心の行相についての第二句にいう「あらゆる有情の利益を為すものでありたい。」とは実に饒益有情戒 (sattvārtha-kriyā-śīla) が示す内容そのものである。

また、初発心を所依として何が発動するかというと、

そして苦しめられた有情たちに彼の悲ある菩薩は〔彼ら有情を〕拔濟することを意図してその心を起す。それ故、その発心は〔法界からの〕悲の等流である。そしてその発心に依止し立脚して菩薩は菩提分法と有情の義利を為すことにおける菩薩の学に努める。それ故、その発心は菩薩の学の所依止である。

duḥkhiteṣu ca sattveṣu sa kārūṇiko bodhisattvaḥ paritrāṇābhiprāyaḥ tac cittam utpādayati. tasmāt sa cittotpādaḥ karuṇā-niṣyandaḥ. taṃ ca cittotpādaṃ niśritya pratiṣṭhāya bodhisattvo bodhi-pakṣeṣu dharmeṣu sattvārtha-kriyāyām ca bodhisattva-śikṣāyām prayujyate. tasmāt sa cittotpādo bodhisattva-śikṣāyāḥ saṃniśrayaḥ<sup>(31)</sup>.

とあり、法界等流としての悲の発現と聞薫習すべき働きとしての初発心が説かれ、まさに菩薩行を行ずるための基盤が成熟されてくるのである。これらに引続いて菩薩の発心が有情に対する悲・有情の利益についての決意に基づくことが詳細に述べられるのである。

すでに発心した菩薩が学ぶべきことからは、具体的には「菩薩地」〈自利利他品〉以下の六つの章にわたって示される<sup>(32)</sup>。これらの学習事項もそのベースには有情の利益を為すことがある、ということに注意すべきであろう。

以上、初発心の菩薩のあり方を概観した。次に、「菩薩地」〈住品〉に示される勝解行住の菩薩のあり方を、戒品に説かれる菩薩のあり方との比較を通して検討する。そこで勝解行住の特色について二箇所引用してみよう。

勝解行住の菩薩は菩薩が本来為すべき事項を十分には為せないということについて、

そしてそのうち勝解行住における菩薩は菩薩の修習において狭小なものであり欠落を為すものであり不定に為すものであり再び所得を失うものである。

tatrādhimukti-caryā-vihāre bodhisattvo bodhisattva-bhāvanāyāṃ  
paritta-kārī bhavati cchidra-kārī aniyata-kārī punar-lābha-  
parihāṇitaḥ<sup>(33)</sup>.

と修習における不完全性をしめし、次に

勝解行住において活動する菩薩は思忖する力がある。菩薩の所応作の加行について思忖するための智慧によって努力する。しかし決して本性としてその[の所応作]を有するのではない。堅固で不退なる菩薩の修習を獲得していないのである。

adhimukti-caryā-vihāre vartamāno bodhisattvaḥ pratisamkhyāna-baliko  
bhavati. bodhisattva-kṛtya-prayogeṣu pratisamkhyāya prajñayā  
prayujyate. no tu prakṛtyā tan-mayatayā. dṛdhāyāḥ avivartyāyāḥ  
bodhisattva-bhāvanāyāḥ alābhī bhavati<sup>(34)</sup>.

と所応作における不完全性を示す。ここでは具体的にどの様に「堅固で不退なる菩薩の修習を獲得していない」のかが示される。即ち、生活用品に対する執着を生じたり、菩薩の神通解脱等持等至などを獲得していないことなどである。これらはすべて内容の上から戒品に説かれる三聚淨戒に住する菩薩のあり方が獲得されていないというように還元できる。それらのなかで、勝解行住の菩薩が自らの前生を忘失すること・菩提心を捨ててしまうこと・菩薩の淨戒を捨ててしまうことなどの可能性があることの理由を、

あちこちの生存のなかに生まれた時、それぞれに生じた者には以前の生存を忘失することがあるから。

upapattau tatra-tatrātmabhāvāntare pratyājātasya pūrvakātma-bhāva-  
vismaraṇāt<sup>(35)</sup>.

と延べ、その危険性を

そしてある時には、発心したにもかかわらず、大菩薩から退失する。

ekadā ca cittam apy utpāditam mahā-bodhād utsrjati<sup>(36)</sup>.

菩薩の戒律儀の正受から離れ或は(それに)耐えられない。

ekadā bodhisattva-śīla-saṃvara-samādānān nivartate notsahate vā<sup>(37)</sup>.

と示し警告するのである。勝解行住を超過するのに第一の無数大劫かかるので

あるから、その間には菩提心を発したことすら忘れてしまうこともあろう。

さてここで、菩薩の受戒が声聞種姓の受具足戒と本質的に異なる例を示し、三聚淨戒の本質に迫りたい。戒品には、

そして手短かに云えば、ただ二つの理由によって菩薩の戒律義の正受を捨てることがある。無上正等菩提における願を棄捨することと、上品纏の波羅夷処法を現行することである。そしてまた菩薩が生が尽きて下方・上方・辺地・あらゆるところに生じつつ、菩薩の戒律義の正受を破らない。菩薩によって誓願が捨てられず、また波羅夷処法の上品の纏を現行しないのならば、一方、生が尽きて憶念を失った菩薩が善友と出會って憶念を思い出させるために繰り返し〔菩薩戒を〕受けるのだが、〔それは〕新たな正受ではない。

samāsataś ca dvābhyām eva kāraṇābhyām bodhisattva-sīla-saṃvara-samādānasya tyāgo bhavati. anuttarāyām samyak saṃbodhau praṇidhāna-parityāgataś ca pārājayika-sthānīya-dharmādhimātraparyavasthāna-samudācārataś ca. na ca parivṛtta-janmā 'pi bodhisattvaḥ bodhisattva-sīla-saṃvara-samādānaṃ vijahāty adha ūrdhvaṃ tiryak sarvatropapadyamāno yena bodhisattvena praṇidhānaṃ na tyaktaṃ bhavati. nāpi pārājayika-sthānīyānaṃ dharmānaṃ adhimātraparyavasthānaṃ samudācaritaṃ bhavati. muṣita-smṛtis tu parivṛtta-jātyā bodhisattvaḥ kalyāṇa-mitra-saṃparkam āgamya smṛty-udbodhanārthaṃ punaḥ-punar ādānaṃ karoti. na tv abhinava-samādānaṃ<sup>(38)</sup>.

とのべられている。三聚淨戒の受持が一度に完全なものになるのではなく、歴劫修行を重ね、繰り返し修習されることで完全にしようと目指すものである。本来、菩薩の本性として行うことができるはずである菩薩の所応作（＝三聚淨戒の内容）を戒品では、四波羅夷処法と四十三輕戒という条項の形で規定している。つまり、菩薩としての本性がまだあらわにされていない菩薩が、三聚淨戒を受戒することによって自らの菩薩としての本性をあらわにする為の努力を自覺的に行うた方途を規定しているのが三聚淨戒である、といえよう。勝解行住の菩薩が受持すべき戒である所以である。

勝解行住の菩薩が転生し、受戒した憶念を失ったとき、繰り返し受戒するが、新な受戒ではない、という一文について、いまここで、いわゆる声聞種姓の者の受戒との比較の上で少し考察を加えたい<sup>(39)</sup>。それを図示すると

|      | 受戒の数限 | 時限    | 戒の本体       | 戒体の因 |
|------|-------|-------|------------|------|
| 勝解行住 | 無数回   | 一無数大劫 | 法界等流に基づく種子 | 菩薩種姓 |
| 声聞種姓 | 1回    | 現世限り  | 無表業（色法）    | 身語業  |

となる。両者の相違はまず、戒の本体において端的に示される。つまり、菩薩は菩薩種姓であることを因とし、法界等流の悲によって饒益有情を発現し、発心して聞薫習の形で受戒し、アーラヤ識に薫習するのである。つまり、アーラヤ識は現世限りで破壊されるのではなくさまざまな形で生死流転するものであり、勝解行住の菩薩にとっては一無数大劫にわたって饒益を目指して修習と所応作を完成し、次の極歡喜住、即ち初地へと悟入するのである。

これに対して声聞では、現世で自利を円満し、阿羅漢果を得て再び転生することがないのであるから、受戒に関してアーラヤ識の必要性をもたず、死して共に壊滅する色法としての戒体でこと足るのである。

以上、勝解行住の菩薩について、三聚浄戒のあり方を論じたが、次の極歡喜住に悟入した後には新たな三聚浄戒、つまり新たな修行が待ち受けているのである。菩薩の階位のそれぞれに三聚浄戒があり、その重層構造が質的に浄化されて行くのか考察しよう。

### 第三節 極歡喜住～最上成満菩薩住

勝解行住の菩薩が未だ菩薩の本来のあり方の通りに活動がすることができないものであることは、第二節に示した如くである。「菩薩地」<住品>には、その勝解行住がすでに清浄になると、先に発趣された極歡喜住が、まさに獲得される。そして、その〔極歡喜住の〕浄化に取り掛ったのである。

adhimukti-caryā-vihare pariśuddhe pramūḍita-vihāraṃ pūrvārabdham eva pratilabhate. tasyaiva ca viśuddhaye pratipanno bhavati<sup>(40)</sup>.

と示された。この住において菩薩は、菩薩の所作である有情の利益を為すこと

などについて勝解・趣入する。そしてそれらの法を速やかに円満にするとされる。

菩薩は極歡喜住に入るにあたって淨勝意樂を獲得し、それを条件として入大地の菩薩となる。本節では入大地の菩薩のあり方が戒品所説の三聚淨戒に規定されている菩薩のあり方に対応するものであることを示し、菩薩の修習としての三聚淨戒の重層構造が初地以上の菩薩の修習についても当てはまることを明らかにしたい。

極歡喜住から最上成滿菩薩住の十住は『十地經』の初地歡喜地から第十地法雲地に相当する。それらにの地に住する菩薩のあり方について「詳しくは『十地經』によるべし」と「菩薩地」〈住品〉に示されている<sup>(41)</sup>。よって本節ではこれに従い、これら十住における菩薩のあり方は主として『十地經』によって概観することにする。

以下に『十地經』所説のそれぞれの地における菩薩のあり方を三聚淨戒に規定される菩薩のあり方と対応させて示す。唯、すべてを示したのでは膨大な量になるので、それぞれの地について一例づつを挙げることにする。

初地：大慈を備えていることによって菩薩がより多くの修習に励むとされる中に、忍耐強く穩和である・慚愧を備えている・善友につき従うといったことが示される。これらは、それぞれ律儀戒に住する菩薩・攝善法戒に住する菩薩のあり方として示される内容である。

第二地：乞われなくても有情たちの仕事 (kriyā) を為す。これは饒益有情戒の相・饒益有情戒に住する菩薩のあり方を示す中に示される。

第三地：菩薩が獲得する神通を示すなかで山を通りぬけるなどの 11 種が示される。これらの神通は饒益有情戒に従する菩薩のあり方を示す箇所を示される。

第四地：柔和な心を持つ・師を尊敬する。これらは律儀戒に住する菩薩のあり方・攝善法戒のあり方として示される。

第五地：衆生を成熟する方便に巧みとなり、神通を実現するようになる、など。これらは饒益有情戒の 11 相・饒益有情戒に住する菩薩のあり方として示される。

第六地：有情の増上慢を除去することが示される。これは饒益有情戒に住する菩薩のあり方として示される。

第七地：十波羅蜜の忍辱波羅蜜として示される内容は、律儀戒に住する菩薩のあり方として示されるものである。

第八地：仏法と僧宝に対してすぐれた施物で供養し恭敬し礼拝する。これは摂善法戒に説かれるものである。

第九地：衆生のさまざまなあり方を如実に知る、ということが示される。これは「菩薩地」〈力種姓品〉に説かれる八種の教授による有情の摂受を説く饒益有情戒に住する菩薩のあり方に対応する。

第十地：自由自在に神通を示現することが説かれるが、饒益有情戒に住する菩薩の神通の発展形態と考えられる。

以上のように、ある程度に対応を見ることができる。戒品に示される事項が漏れなく『十地経』に示されているというわけではなく、特に上の階位にゆくにつれて具体的な事例で対応するものは少なくなっていく。しかし、何れの階位で示される菩薩のあり方であれ饒益有情との関連において示されているものであることは明らかである。また、それらは戒品に示される菩薩のあり方を完成するために必要な条件であると考えられる。具体的な事例は、有情を饒益するというあり方が完全でないからこそ示される必要があり、完成度が高くなればなるほど具体的なあり方での限定が少なくなると考えれば具体的事例の対応が少なくなることは納得できよう。少なくとも、初地・第二地・第三地での対応関係を見る限り、三聚浄戒に規定される菩薩のあるべき完成した姿は初地以上の菩薩に当てはまるものであると考えられる。

#### 第四節 小 結

以上、菩薩の諸階位三聚浄戒が菩薩のあるべき姿を示すものとしてかかわることを示してきた。即ち、(1)種姓住の菩薩には、三聚浄戒に示される菩薩のあるべき姿がただ因としてのみ存在しており、それが随煩惱に随染されて隠されている。また自覚的に本性としての菩薩のあり方を完成しようとするわけでもない。(2)勝解行住に住する菩薩は、菩薩の本性としてあるべき姿を完成しよう

と自覺的に修習する。その間に三聚淨戒を受持し漸次に完成度を高めてゆく。  
(3)極歡喜住以上の十住においては淨勝意樂を得て、更に菩薩としての本性を完成するに至る。

菩薩のあるべき姿を、三聚淨戒の規定はある意味では理想的な形態で示している。それ故に菩薩のあらゆる階位において三聚淨戒の規定があてはまるのである。しかし、上に述べた三段階はそれぞれ修習の形態が異っており、その異なった修習形態にそれぞれ〈重層的に〉三聚淨戒の修習を当てはめ得ることになるのである。

## 第二章 菩薩の学習事項内における三聚淨戒の位置づけ

第一章では菩薩の階位における三聚淨戒の位置づけを修習の深まりの段階という時間軸として捉えた。本章では六波羅蜜の中に三聚淨戒を位置づけ、その持つ意味を明確にしたい。

### 第一節 六波羅蜜と三聚淨戒との関係

戒品が菩薩の六波羅蜜を三聚淨戒との関係の上で全体として如何に捉えているかを先ず示しておきたい。戒品のまとめとして、

以上が菩薩の大菩提という果を生起させる大戒蘊（戒品の所説すべてをさす）であって、それに依止して菩薩は戒波羅蜜を円満にして、無上正等菩提を現等覺する<sup>(42)</sup>。

と述べる。これによれば、戒品の所説は戒波羅蜜の完成にのみかわるものである。次に、この戒品の所説全体が三聚淨戒に約して次のように提示される、そして、この戒は説示されたように自性戒などの九種であって、三種からなる戒、即ち律儀戒と摂善法戒と饒益有情戒とに包含されると知られるべきである。更に、その三種よりなる戒は菩薩の三つの所作を為す。律儀戒は心の安定のために働き、摂善法戒は自己の仏法の成熟のために働き、饒益有情戒は有情の成熟のために働く。そしてこれだけが菩薩のあらゆる所応作なのである。即ち、現法樂住のために心を安定させることと疲れを知らぬ身心〔を

もつ菩薩」の仏法を成熟することと有情を成熟することとである<sup>(43)</sup>。

である。三聚淨戒があらゆる菩薩の所応作であるとされているが、菩薩の所応作とは六波羅蜜に集約されるものであり、これは六波羅蜜すべてが三聚淨戒に包含されていると示していることに他ならない。

これまで三聚淨戒を重層構造として、ほぼ一括的に捉えてきた。ここで三聚淨戒の相互関係、そしてそれぞれの特色を多少追求する必要があるだろう。そこで三聚淨戒についてそれぞれの対象と働きという観点からみると、律儀戒は心を住させる・摂善法戒は自らの仏法を成熟させる・饒益有情戒は有情を成熟させるというように、それぞれは個別の意味を持っていることが判明する。第一章、第二節で見たように、菩薩のあり方の基本は有情の義利を為すことにあり、律儀戒・摂善法戒の二つは饒益有情を前提として初めて成立するという相互関係も判明する。

さて、戒品は菩薩の戒波羅蜜を説く章である。しかし、戒波羅蜜以外の学習事項を説く章、特に布施波羅蜜（「菩薩地」〈施品〉）・忍辱波羅蜜（「菩薩地」〈忍品〉）の中に戒品所説の三聚淨戒の規定をいくつか見いだすことができる。このようにこれら三聚淨戒の三種の戒はおのずと六波羅蜜という領域において包含関係にあり、そこに三聚淨戒の一つの特色が示されると思われる。以下に、六波羅蜜に分類される菩薩の学習事項のなかでこの包含関係を明らかにする。

## 第二節 六波羅蜜の中での三聚淨戒の位置づけ

ところで「菩薩地」の布施・忍辱・精進・静慮・智慧の各波羅蜜を説く章で規定される菩薩のあり方は三聚淨戒で規定するような菩薩のあり方と対応するものがある。そのなかで、忍辱・精進・静慮・智慧の各波羅蜜を説く章では饒益忍・饒益精進・饒益静慮・饒益智慧と分類される項目が立てられる。そして、それらについては饒益有情戒に準じて理解されるべきことが示される<sup>(44)</sup>。つまり、饒益に関してはそれぞれの波羅蜜は饒益有情戒と同一のあり方をすべきであるとするのである。

ここで『大乘莊嚴經論』『度摂品』（以下、度摂品）の記事を参考にし、この六波羅蜜に三聚淨戒の機能を配当する。



度摂品では戒波羅蜜の利他の功德を説く箇所では三聚淨戒が示される。即ち梵本第 37 偈に、

常に、仏子たちによって禁戒と努力からなる、三種の戒が受け取られる。天界が意図されず、再び行ってもそこに執着が置かれない。そしてその戒によってこそ、すべてのひとびとが三〔乗〕の菩提に高められる。そして戒は智に包摂され、更に世間において尽きることなく住せしめられる。

āttaṃ buddha-sutair yamodyamamayaṃ śīlātrayaṃ sarvadā svargō  
nābhimataḥ sametya ca punaḥ saktir na tatrāhitā /  
śīlenaiva ca tena sarva-janātā bodhitraye ropitā śīlaṃ jñāna-  
parigraheṇa ca punar loka 'kṣayaṃ sthāpitam //37//<sup>(45)</sup>

a パダで示される禁戒と努力からなる三種の戒は、世親釈によれば、禁戒を自性とするのが律儀戒、努力を自性とするのが摂善法戒と饒益有情戒であるとされる。戒波羅蜜を利他の功德という観点から見れば、三聚淨戒に分けることができる、という主張である。

ところが、戒波羅蜜が様々に分類される中で、明らかに律儀戒を指し示して規定された項目がある。数の観点から分類された内の一切種の道に関するものであって「境に対する無執着の道」に達する散乱の制御において、比丘の律儀に住するものは境を得るために一切の業の散乱を行わないから」<sup>(46)</sup>、また、差別を摂する内の働きの項目では、「表示得と法性得とが律儀に住するものである。表示得とは波羅提木叉の律儀に摂せられ、法性得とは、禪定と無漏の律儀に摂せられる」<sup>(47)</sup>という。また、「持戒が布施等の原因である。比丘の律儀を受けるのはあらゆる自己の所有物を捨てるからである」<sup>(48)</sup>という。このような提示の仕方がなされるということは戒波羅蜜についてはその内容を限定するならば、律儀戒のみに限定することができるということであろうか。

ところで、六波羅蜜が相互に確定しあう、という分類項目が挙げられるなかに、「摂善法戒によって一切の布施など（＝六波羅蜜）を摂する」<sup>(49)</sup>、「摂善法戒を受持するのは一切の布施等の因縁である」<sup>(50)</sup>という規定がある。戒波羅蜜のなかで説かれた三聚淨戒の一分である摂善法戒が六波羅蜜全体を包摂する、という主張である。

この分類の仕方に従えば、律儀戒は狭い範囲（自らの心を安住させるのみ）での戒波羅蜜であり、摂善法戒については六波羅蜜すべて、そして饒益有情戒は名前だけ出されていて何の解説も加えられていないが四摂事を含んだあらゆる饒益の事柄を包摂する形態であると考えられないだろうか。

そのように考えれば、菩薩の本性である饒益を為すことは、饒益有情戒として菩薩の学習事項すべてを包み込む。摂善法戒は、饒益を為すために必要な資糧を積むための自利（＝自己の仏法の成熟）の六波羅蜜を修習すること全てを包み込む。更に、律儀戒は自らの心を安住させるために定められた、と考えることができる。

ところで『摂大乘論』では、『大乘莊嚴經論』と同様な分類の仕方、六波羅蜜をのべる。その中、六波羅蜜の差別を示す中で、戒波羅蜜に三種があり、それは律儀戒・摂善法戒・饒益有情戒であるとされる<sup>(51)</sup>。しかし、ここでは、それら個々の解説はされず、ただ名前が示されたに過ぎない。ところが、『摂大乘論』増上戒学の章では菩薩戒に三種ありとして、これら三聚浄戒を提示する。そして、この増上戒学を「菩薩地」戒品に示されるものであるとする<sup>(52)</sup>。この規定にしたがって、『摂大乘論』第四章に規定さる戒波羅蜜は、そのあり方をみると、「悪戒・悪趣を止滅させ、善趣・三昧を得させる」<sup>(53)</sup>「優れた生まれのものとなる」<sup>(54)</sup>「尸羅において違犯することがない」<sup>(55)</sup>という内容であり、律儀戒に配当されるべきもののようである。そして、一切の善法は六波羅蜜によって摂せられる、といわれることについては摂善法戒を指していると考えられる。

以上まとめると、律儀戒は戒波羅蜜のみを指し、摂善法戒は六波羅蜜全体を指し、饒益有情戒は六波羅蜜に四摂事を加えた菩薩のあらゆる利他の行を指すものと考えられる。

### 第三節 小 結

三聚浄戒は戒波羅蜜の一部として三種の戒を並列的に示されたように見える。しかし、それぞれの戒の機能を菩薩の学習事項のなかにおいて分類すると、律儀戒＝自利に関わる戒波羅蜜のみ

摂善法戒＝自利に関わる六波羅蜜すべて

饒益有情戒＝利他に関わるあらゆる菩薩の行

を指し示している。三聚淨戒が一切の菩薩の階位における所応作を示すものである。故にここでも菩薩の修習における重層構造のなかで、機能を果たすことが納得されよう。

### 第三章 結 論

#### 第一節 菩薩の階位と三聚淨戒

第一章において菩薩の階位——「菩薩地」所説の十二住——を大きく三つの部分に分け、それぞれの階位の菩薩のあり方と戒品所説の三聚淨戒に規定される菩薩のあり方とを対比させながら、菩薩の修習の重層構造を明らかにした。略説すると、種姓住の菩薩にとって三聚淨戒に示される菩薩のあり方、つまり菩薩の本性としてのあり方は、ただ因としてのみ備わっているものであり発現されてはいない。勝解行住の菩薩は、菩薩の本性としてのあり方を、初発心することによって自覚的に実現しようとする。その為の規定が三聚淨戒であり、歴劫修行において本性を円満にするべく修習を重ねるのである。そして極歡喜住に悟入した後は、凡夫地を越えた菩薩として菩薩の本性を円満にすべく邁進する。この階位に悟入すれば菩薩の性に任せて饒益をなし得るのである。

そして、それぞれの階位で菩薩が目標として修習するのは（種姓住にある菩薩は自覚的に修習するわけではないとしても）三聚淨戒である。これが、本稿で示した重層構造である。勝解行住の菩薩を検討するさいに、声聞が受持する比丘戒と三聚淨戒（菩薩が受持する比丘戒などである律儀戒を含む）の違いについて菩薩の修習が多世にわたるものであくことから触れたが、三聚淨戒を受持する基盤は法界等流の悲であった。

この菩薩が三聚淨戒を受持する基盤に留意して、菩薩の修習の重層構造という観点から、ここで極歡喜住の悟入の前後での菩薩のあり方をいま少し考察してみたい。検討する資料は『摂大乘論』第六章に示される次のような菩薩戒の定義である。

また〔菩薩の〕身語の業、それは化現されたものであるが、これらもまた菩薩の甚深なる戒であると知られるべきである<sup>(56)</sup>。

具体的には、身語の二業によって有情を悩害したりして、そのことによって有情を戒の中に安立するというそのことが菩薩の戒であるとされる。つまり、菩薩の身語の二業が菩薩の戒であるとされている。この定義の意味を考える前に『摂大乘論』第四章に示される六波羅蜜の総括的定義を見てみよう。ここでは、「六波羅蜜が唯識性（初地）への悟入の因であり果である」<sup>(57)</sup>とされ、初地に悟入する以前には因であり、悟入した後では、六波羅蜜を常に途絶えず、無間に修習するということが六波羅蜜の果である、とされる。摂善法戒にあつては六波羅蜜は修習されるべき善法であり、ここでいう、初地への悟入の因である。初地に悟入したのちには果として六波羅蜜を修習するというのは、饒益有情の実践としての六波羅蜜の修習と考えられはしないだろうか。つまり、『摂大乘論』第六章に示される「菩薩の身語の業が戒である」という主張は「菩薩の戒波羅蜜とは菩薩の身語の業によって有情をして戒波羅蜜を修習せしめる」というように読むことができないだろうか。今後の検討を待ちたい。

## 第二節 六波羅蜜の中での三聚淨戒の位置づけ

戒品は戒波羅蜜を説く章であるとされる。しかし、その所説の三聚淨戒のうち実際に直接戒波羅蜜にかかわるものは律儀戒のみであった。『大乘莊嚴經論』の所説との対照を通して明らかになってきたことであるが、三聚淨戒は、摂善法戒が六波羅蜜全体に関わる戒であると考えられ、饒益有情戒は菩薩の本性である「有情に対する義利をなすこと」すべてに関わる戒である、と考えられた。即ち三聚淨戒はあらゆる菩薩の所応作を戒という形式によってまとめ上げ、さらに、菩薩の修習に資するかたちにまとめられたものである。

## 第三節 今後の検討課題

本稿では、三聚淨戒を〈一つの整合のとれた体系〉として捉えようとしたため、論考するにあたっては論証・例証などを必ずしも十分には提出していない。特に、第一章で示した菩薩の階位における三聚淨戒の位置づけについては改め

で詳論することを期したい。また、第二章での六波羅蜜と三聚淨戒との関係を論ずるに当たっては、使用した資料の数が十分であったとは言えない。この点、学問的ではないとのそしりは甘んじねばならない。特に、唯識系論書の記述を十分に網羅していない点については、改めて別稿を期したい。また、六波羅蜜との関係で論ずる場合には、さらに『ラトナーヴァリー』・『シクシャーサムツチャヤ』・『ボーディチャルヤヴァターラ』など中観系論書との比較検討をも行うべきであった。ただ、戒品所説の菩薩戒を体系的に捉えるための方向性を示し得たわけであるので、この視点を更に確実なものにするよう、今後の研究を行ないたい。

#### 第四節 終 わ り に

本稿では、一方では菩薩行の重層構造という視点から、菩薩の階位と三聚淨戒の関係を、もう一方では六波羅蜜のなかに三聚淨戒を位置づけ、その性格をあきらかにしようとした。その試みが十分に果たせたとは思っていないが、少なくとも菩薩戒研究の一つの方向性を示し得たと思う。諸賢の御批判を乞う次第である。

#### 注記

- (1) 例えば、大野法道『大乘戒經の研究』1954年、pp. 188～  
羽多野伯猷「瑜伽行派の菩薩戒をめぐって」『鈴木学術財団年報』14号 1977年など。
- (2) JOHNSTON, E. H. *The Ratnagotravibhāga Mahāyānottaratantrasāstra*, Patna, 1950. pp. 15～16 及び宇井伯寿『寶性論研究』1959年、p. 505 註(2)を参照されたい。  
また『大乘起信論』の帰敬偈に「帰命尽十方 最勝業偏知 色無礙自在 救世大悲者 及彼身体相 法性真如海 無量功德藏 如実修行者」(大正32巻、p. 575 b.)とされ、如実修行の者が供養される対象とされている。
- (3) WOGIHARA, Unrai. *Bodhisattvabhūmi* (以下 Bbh.), Tokyo rep. 1971. pp. 160 11.26～161. 4
- (4) Bbh. p. 142 11. 8～16
- (5) 戒品所説の受戒法を参照されたい、Bbh. pp. 152～155
- (6) 拙稿「*Bodhisattvabhūmi*—戒品に於ける懺悔について—」『宗教研究』279号、1989年においてこの〈重層構造〉の骨格を提示した。
- (7) 「菩薩の律儀戒とは、およそ七衆の別解脱律儀の摂受、つまり比丘・比丘尼・式叉摩

- 那・沙弥・沙弥尼・優婆塞・優婆夷の戒，それがこの在家分と出家分において適宜に知られねばならない」 Bbh. p. 138 11.24～27
- (8) 平川彰「大乘戒と菩薩戒経」『福井博士頌寿記念東洋思想論集』1960年 p. 532 には「相互に背反する内容を持つ声聞戒と菩薩戒とを同時に受けることは不可能である。たとい受けたとしても内実的には無意味」という。
- (9) “yāś ca Daśabhūmike sūtre daśa bodhisattva-bhūmayāḥ, ta iha bodhisattva-ṭṭhaka-māṭṭkā-nirdeśa-daśa-bodhisattva-vihāra yathākramam pramudita-vihāram upādāya yāvāt parama-vihārād veditavyāḥ.” Bbh. p.332 11.21～25
- (10) LEVI, Sylvain, *Mahāyāna-sūtrālamkāra* (以下, MSA.), Paris. 1907.
- (11) 以下, 『撰大乘論』については, LAMOTTE, Etienne, *La Somme du Grand Vehicule d'Asanga*, Louvain-la-Neuve, 1973. (以下, MS.) の科段番号によって引用箇所を示す。
- (12) 宇井伯寿『瑜伽論研究』 pp. 43～81 を参照のこと。
- (13) 宇井前掲書 p. 44 を見よ。
- (14) MS. VI-2
- (15) 受戒法では, 能授の菩薩は最初に「おまえは菩薩であるか, 菩提において誓願をたてたか」と問う (Bbh. p. 153)。菩薩が誓願をたてるのは初発心の時が最初であるので (Bbh. p. 12)、この問いは能受の菩薩がすでに発心していなければならないことを示す。
- (16) 比丘戒の戒体が受戒儀軌において初めて獲得されるものであることと, 菩薩の戒である, 三聚淨戒の戒体 (=種子) は因としてすでに具足されたものであることの違いを考慮すべきである。
- (17) 菩薩の種姓の相が随煩惱に随染されており発現していないことは, 「菩薩地」〈種姓品〉に示される。Bbh. p. 10 11. 1～12
- (18) Bbh. p. 319 11. 8～13
- (19) 高崎直道『如来藏思想の形成』 pp. 302～318 を参照のこと。『大乘十法経』に説かれる種姓住の菩薩について『瑜伽師地論』との関連を含めて詳論される。
- (20) Bbh. p. 319 11. 1～3
- (21) Bbh. p. 4 11.13～15
- (22) Bbh. p. 4 11.16～18
- (23) Bbh. p. 6 11. 5～8
- (24) Bbh. pp. 4 11.16～9 .23 に示されるものと戒品で示される撰善法戒のあり方, 饒益有情戒のあり方, 律儀戒・撰善法戒・饒益有情戒に住する菩薩のあり方とは内容的に一致する。Bbh. pp. 189 11. 1～152 19 を参照。
- (25) 註(17)を見よ。
- (26) Bbh. p. 319 11. 5～8
- (27) Bbh. p. 319 11.13～17

- (28) 自性・行相・所縁・功德・最勝の五
- (29) Bbh. p. 12 11. 1～4
- (30) Bbh. p. 12 11. 6～9
- (31) Bbh. p. 13 11. 5～11
- (32) 自利利他品・真實義品・威力品・成熟品・菩提品・力種姓品
- (33) Bbh. p. 321 11.13～15
- (34) Bbh. p. 322 11. 6～10
- (35) Bbh. p. 323 11. 4～6
- (36) Bbh. p. 323 11.17～18
- (37) Bbh. p. 323 11.18～19
- (38) Bbh. p. 159 11.23～160 9
- (39) 声聞種姓と菩薩種姓の受戒における戒体獲得の違いなど、この問題については仏教大学大学院の伊藤博志氏が稿を用意しておられ近々発表する予定であると聞いているから、そちらを参照されたい。
- (40) Bbh. p. 319 11.17～20
- (41) 例えば Bbh. p. 332 11.20 など
- (42) Bbh. p. 187 11.16～18
- (43) Bbh. p. 188 11. 1～15
- (44) 例えば忍品 Bbh. p. 194 11.24～25；精進品 Bbh. p. 206 11.26～27
- (45) MSA. P. 108 11.10～13
- (46) MSA. P. 100 11. 6～7
- (47) MSA. P. 105 11. 2～4
- (48) MSA. P. 115 11.26～28
- (49) MSA. P. 115 11.19～20
- (50) MSA. p. 115 1 .28
- (51) MS. IV . 9
- (52) MS. VI . 1
- (53) MS. IV . 7
- (54) MS. IV .12
- (55) MS. IV . 1
- (56) MS. VI . 5
- (57) MS. IV . 1

[本稿作成にあたって、仏教大学大学院博士後期課程在学中の伊藤博志氏にひとかたならぬお世話になりました。記して御礼申し上げます。]